

／特／集／
まえがき

新しい社会運動の胎動

新井田智幸

毎週金曜の夕方、首相官邸前は騒然とした雰囲気包まれる。続々と集まるのは、若者、女性、家族連れが目立つ雑多な人びとで、色とりどりのアピールグッズに覆われた人波からは「再稼働反対」の声が絶えることはない。

原発再稼働に反対する市民が継続的に行ってきた抗議行動は、大飯原発の再稼働を目前にして爆発的に大きくなり、ついには10万人単位が集まる歴史的な規模に膨れ上がった。社会運動は明らかに力を取り戻しつつある。

このような動きは、2011年来の世界的な民衆運動の動向と無関係ではない。アラブ革命やオキュパイ運動は、その新しい運動のスタイルによって、日本の運動をも変えてきた。

「フェイスブック革命」とも呼ばれるように、IT技術やソーシャルネットワークが活用されることもその一つだが、より本質的なのは運動の組織のありかたである。現在の運動の特徴は中心性がないことにある。リーダーのもと、明確な目標と戦術をもって闘うというスタイルではなく、ゆるやかな水平的ネットワークとして運動が形成されている。近年の運動の飛躍は、この形態が広く受け入れられたことによるといってよいだろう。

一方、その陰で、従来型の運動との連続性が強い政党の活動や労働組合運動は注目を浴びにくくなっている。しかし、そうした組織的な運動も、この潮流から影響を受けて相乗的に運動を盛り上げる役割を担っていることを見過ごしてはならない。

本特集では、世界および日本のこうした社会運動の動向について、いくつかの視点からみていく。執筆者はすべて若手研究者であり、

研究の傍らこうした運動にも関わっている者である。現場に足を運んでいる経験を踏まえて、こうした新潮流の特徴や意義についてそれぞれ分析がなされている。

原論文は、アラブに始まった世界的な運動の流れと日本の原発反対運動との関係について述べている。エジプト革命でみられたような運動のエートスが日本の運動にも波及していることが描かれている。

島野・本田論文は、オキュパイ運動の現地を訪問し、そこで見た運動の様子や活動家との交流をまとめた見聞録である。この運動の特徴である運営のされ方などがリアルに伝わる内容である。

木原論文は、激戦となった京都市長選を題材に、政党の運動と新しい運動とが連携して力を発揮した局面を描いている。独裁政治に対抗するような運動の可能性が示唆される内容である。

梶原論文は、長い伝統を持つ原水爆禁止運動が3.11の核災害のインパクトから受けた影響、および今後の運動の課題について、若手活動家の視点から述べている。

最後に、座談会企画では、この新潮流の、民衆運動の歴史からの位置づけ、新自由主義イデオロギーとの関係、労働組合の役割などが議論されている。

こうした新しい運動は若者が中心に担っているというイメージで語られることが多い。しかし、今でも運動経験豊富な年輩の方が、陰に陽に支えていることによって運動は続いている。本特集は若手の視点から書かれているものの、運動の発展のために世代をこえて参考にできるものになればと願っている。

(にいだ・ともゆき：東京大学(院)、経済思想)